

## 平成 28 年度 第 3 回三重県経営戦略会議概要

日 時：平成 29 年 1 月 24 日（火）13:10～15:50

場 所：三重テラス イベントスペース

出席者：加藤委員、白波瀬委員、津谷委員、西村委員、速水委員（座長）、  
増田委員、宮崎委員、鈴木知事

### はじめに

#### 鈴木知事：

- ・ 当会議の柱は大きく 2 つある。1 つは、各年度の経営方針を決めるにあたり大所高所からご指導をいただくことであり、もう 1 つは、中長期的な長いレンジのお話をいただくことである。この時期に開催する当会議は長いレンジの話をしていただくことが多い。
- ・ 本日は、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックおよび 2033 年の第 63 回神宮式年遷宮のあたりまで、どのように三重県が取り組んでいくべきか、どういうことに留意するべきかということを議論していただきたい。
- ・ 直近の状況について報告すると、伊勢志摩サミットはおかげ様で成功裏に終わり、今でもサミットの効果が続いている。例えば、三重県が生産量日本一のアオサノリは、今年の初市において、単価が昨季の約 6,000 円から約 3,000 円アップの約 9,000 円になった。このほか、平成 29 年の正月期間の主要観光施設入込客数は前年に比べて増加しており、サミット決定を受けた平成 28 年も 14%伸びているなかで、それが継続している状況にある。平成 28 年の県内延べ宿泊者数も平成 25 年の過去最高に迫る勢いであり、そうした点をしっかり持続させていくためにも様々なご指導をいただきたい。
- ・ 一方で平成 29 年度は、国体まであと 5 年という時期であり、スポーツを始め、防災なども含めてしっかり取り組んでいかなければならない年である。日本で 100 年以上続く、4 年に一度の菓子博が 4 月に開催されるなど、今年も三重県は話題満載であり、しっかり頑張りたいと考えているので、皆様からのご指導、とりわけ本日は中長期的な観点からのご指導をいただきたい。

#### 速水委員（座長）：

- ・ 本日は、非常に大局的な長いレンジの話、スポーツを含めた仕組みの考え方などについて議論していただく。特にオリンピック・パラリンピックに関しては、具体的に開催時期が決まっており、どんどん動いているところである。各県がどのように対応していくのか、しっかりと考えていかなければいけない。

- ・ 2つ目の議題については、2030 年に向けての長期計画、中長期計画をイメージして議論していただければと思っている。

### **議題 1 : 東京オリンピック・パラリンピックを生かすために**

#### **加藤委員 :**

- ・ 私は運動神経が良くないということもあり、オリンピック・パラリンピックについて全く不得意だという前提で話をさせて頂く。
- ・ オリンピックとパラリンピックの開催期間は両方を合わせてせいぜい1 か月間。サミットと一緒に、イベントそのものに期待をするのではなく、それをきっかけに持続できることを考えなければいけない。
- ・ あるゼネコンのトップから聞いた話では、全国の建築着工の7割が東京都心3区（千代田、中央、港）に集中しており、その過半が2019年から2020年にかけて竣工するそうだ。おしなべて、色々なものがそのような状況になっている。オリンピックを念頭に置いて過大な需要を積み上げてしまうと、後から大変なことになる。

#### **津谷委員 :**

- ・ 今回の資料から、県庁の担当者の皆さんの努力が感じられ、感心した。県政に関しても、鈴木知事以下、積極的に情報公開されており、真摯に取り組む姿勢と努力に、心から敬意を表したい。
- ・ オリンピック・パラリンピックは東京を中心に南関東で行われる大会なので、三重県はその後の外国人観光客の誘致にターゲットを絞るべきである。欧米からオリンピックを機に日本を訪れる外国人観光客は、まず京都を訪れるだろう。しかし、京都は観光客が多すぎて十分にホテルの客室数がなく、なかなか予約が取れないと聞く。京都に近い奈良には十分に宿泊施設が無く、多くは大阪に泊まるようであるから、伊勢志摩の自然や宿泊施設をアピールして外国人観光客の呼び込みに注力してはどうか。都会から伊勢志摩来ると自然の美しさや食の美味しさに感動されると思うので、スマホのアプリなどを活用したり、海外のメディアへの露出を図ったりして、伊勢志摩の魅力についての情報発信をすることが大切である。三重県は京都まで地理的に近いうえに、伊勢志摩サミットなどで国際的にも知られつつあるので、外国人客の訪問率をどう高めていくかが重要である。
- ・ もう1つ、女子レスリングの吉田さんや土性さんなど、三重県出身のオリンピックメダリストが多くいるので、現役選手が難しければ、過去のオリンピックメダリストや出場者にオリンピック・パラリンピックのスポークスパーソンになっていただくと良いのではないか。
- ・ 少し哲学的な話だが、パラリンピックの出場選手をみて「欠けてこそ人間の幸せだ」という言葉を思い出した。三重県とゆかりが無くても、パラリンピ

ックの選手に来ていただいて、三重県民、特に若い人と交流してほしい。今の若い人たちは非常に恵まれた環境で育っているが、健常で五体満足でいられることは当たり前ではないことを認識する機会になる。三重県全体として、健常者とか障がい者とか意識しなくてもいられる環境作りが大切だ。施設のバリアフリー化といった取組と合わせて、力を入れていただきたい。

#### **西村委員：**

- ・リオオリンピックでは、競歩の銅メダルを剥奪された後に取り戻したが、現場ではものすごい情報戦があったようだ。日本人は遠慮深く、今までそういうことをやってこなかったらしいが、リオは科学的に戦って成果を上げたオリンピックだと言われている。
- ・特に、科学技術を使ってスポーツ選手の記録を上げることが重要視されるようだ。体内温度を上がらないようにすると疲労がとれるということで、マラソンの前に冷水のプールに入ったりしているらしい。この話を聞いて、技術力の高い三重県の中小企業と、オリンピックに出るようなトップアスリートを結び付けられないかと考えた。例えば、スラリーアイス、ナノアイスというものすごく細かい氷で冷やすと疲労回復効果が高いとアメリカで言われ始めている。これを三重県のある企業が作っていて、リオで活躍した土性選手に試しに使ってもらったら効果があったと聞いている。トップアスリートがアイシングにナノアイスを使うようになれば、世界中の大学や高校、アマチュアでも同じように導入され、機械装置が売れる可能性がある。オリンピックを通過点として、三重県の中小企業の技術力をアピールするというような、「三重県の産業界をオリンピックによってどう伸ばすか」という視点があると良い。

#### **増田委員：**

- ・パラリンピックについては、障がいを持つ方々が、世界で活躍するアスリートの姿を見てトレーニングに励み、次の大会に出場するということがあるようだ。オリンピックに出てくる選手は揃ってスーパースターだが、パラリンピックに出ている選手の姿こそ、三重県民の自信や夢につながるのではないか。パラリンピックを通じて、若い人達に夢を持ってもらうチャンスを提供すると良い。
- ・また、パラリンピックをきっかけに、目の不自由な人に対して、転落防止になるサインを付けるなど、障害になりそうなものを無くして、三重県の街のユニバーサルデザイン化を進めるのも良い。
- ・キャンプ地として立候補することは、三重県の良さをアスリートに伝えるために効果的で良いと思う。ただし、「オリンピックの効果を自県に」という各県の争奪戦には巻き込まれてほしくない。むしろ、2019年のラグビーワールドカップに目を向けるべきだ。オリンピックでは観戦者の滞在期間は長くて

も2週間程度らしいが、ラグビーワールドカップでは1か月くらい滞在する人が相当いるようだ。富裕層が多く、試合の合間に自然豊かな観光地を訪れるようで、前回のロンドン大会でも湖水地方に行く観光客が多かったらしい。まずは開催期間中に訪れてもらい、その後リピーターになってもらう努力が必要だ。

**白波瀬委員：**

- ・増田委員に質問なのだが、ラグビーワールドカップの時に長期間滞在するという話は、欧州圏内の人達のことか。

**増田委員：**

- ・南半球にラグビーのファンが相当多くて、チームも強い。オーストラリア、ニュージーランドのあたりの人達が熱狂的で、約1か月滞在する。欧州も確かに来るが、それほど数は多くない。前回も相当な人がオーストラリアからイギリスに行っている。日本はオーストラリアやニュージーランドから距離的にも近く、かなり来訪すると思う。

**白波瀬委員：**

- ・前回も同じようなことを言ったが、2020年のオリンピックについて、決して忘れてはいけないのは、取り残され感がある人を1人でもなくしてほしいということだ。ある意味でオリンピックが到達点ではなく通過点だということと共通するのだが、その通過点をいかに積極的な形で位置づけるかということが非常に重要だと考えている。
- ・オリンピック・パラリンピックまであと3年しかなく、今からアスリートを育てると言ったところで、既にオリンピックに出場する選手の層は決まっているだろう。教育者という視点から申し上げると、あまりその部分には力を入れず、スポーツ立県として、三重県は非常に層が厚い地域であるので、障がいを持つ、持たないということも含めて、特待生への奨学金制度のような形を積極的に取り組んではどうか。
- ・障がい者のための積極的なまちづくりということに関しても、パラリンピックが良い機会となり、地域全体にとっても大きな意味があるものになるだろう。パラリンピックに出場する人とそうでない99%の間にある落差は仕方ないものとして、県の予算を使って障がい者アスリートをターゲット型で育てることと、障がい者と障がいをもたない者が街で一緒に暮らすことの2段階の対策が、オリンピック・パラリンピックに絡めた教育的な取組であると考えている。子ども達にとって、オリンピックの意味を理解することは難しいだろう。しかし、子ども達が「出たい」と思うイベントの一つでもあり、その気持ちにできるだけ対応することが大切だ。また、オリンピック・パラリンピック後も、裾野をどのように拡大していくかが重要である。

## 宮崎委員：

- ・以前、知事が「昨年のサミット効果は、非常に良い影響があったところと、あまり影響のなかったところとまだらな状況だった。」と仰っていたが、あまり申し訳なく思う必要はない。これは結局、やる気のあったところとなかったところの差ではないか。恐らくオリンピックも一緒に、県が様々な仕掛けをしても、自ら努力をしないところには効果がないのではないか。
- ・前回の洞爺湖サミットでは、警備に関係した警察官が開催後に多く観光に訪れていたようだ。サミット開催に向けて全国から警察官が長期間応援に来てくれるが、それらの警察官がサミット終了後に家族への罪滅ぼしとして再び旅行で訪れるらしい。私はそういう話を知っていたので、伊勢志摩サミットで関係した旅館などに割引特典などを付けてはどうかと言ったのだが、やはり警察官が多く来てくれたようだ。
- ・三重県はオリンピックで直接効果を受けるというより、それに付随した観光客をどう呼び込むかが、我々のような食の業者にとっても重要なところになると思う。現在、3年後を睨んで東京で色々な店に商品を提供しているが、多くの居酒屋には英語メニューがない。ガイドブックに載る有名なところでも外国語メニューがないので、我々はメニューなどの外国語表記化を進めている。ただ、直訳のものでは「シズル感」がないので、居酒屋が大好きな外国人と一緒に回って研究を進めている。東京オリンピックだと言って、待っていても外国人が来るわけではないので、それに対してどう対応していくかを自らで考えなければいけない。
- ・日本はユニバーサルデザインの普及率が非常に高いらしい。確かに、エレベーターとか設備や機械については進んでいるかもしれないが、車椅子を押したり、電車ではシルバーシートではなくてもお年寄りに席を譲るなど「心のユニバーサルデザイン」の浸透はまだまだ遅れている。日本人は気持ちを機械とか設備に置き換えてしまった歴史があるのではないか。三重県はサミットのおかげで、鳥羽や伊勢などでもバリアフリー化が非常に進んだが、これからはもっと心のバリアフリー化を進めていくことが大事だと思う。そういう教育がもっと進めば、本当にダイバーシティの先進県になれるはずだ。
- ・津谷委員からもお話があったが、今は本当に京都で宿が取れない。私の知っている外国人は、京都の次にどこへ行くかという、金沢へ行くそうだ。金沢でお寿司を食べるらしく、有名なところでは2か月前くらいに予約をしておかないと入れないようだ。
- ・亀山は東名阪自動車道、伊勢自動車道、新名神高速道路などの結節点でどこへ行くにも非常に便利なところだ。シャープの亀山工場が来た時にホテルが多く建ったものの、その後はシャープが撤退してホテルは閑古鳥が鳴いていた。最近では、中国の観光客が泊まって伊勢志摩や名古屋へ行くというパターンが増えている。京都へ行くにも、名古屋へ行くにも、もちろん伊勢志摩

に行くにも、亀山のインターチェンジを活用することで便利になる。こういう違う視点で観光客を呼び込むことは大事だ。

- ・サミットで使われたということは何事にも代えがたいブランディングになるが、意外とそういう意識を持って活用している人が少ない。今度のオリンピックでは、そういう指導を県でもやっていただければ良いと思う。

### **速水委員（座長）：**

- ・競技スポーツや学校スポーツを市民スポーツ化した件について、もっと様々な市民スポーツを地域で盛んにする仕組みを作るなど、もう少しテコ入れをしなければいけない。未だに学校スポーツは残っているし、実際には市民スポーツ化されていない。お金をかける必要もないが、少し考える必要があるのではないか。
- ・競技によって状況はバラバラで、マラソンは学校に頼っている一方、レスリングは強いクラブチームができていく。どの競技においても市民スポーツとして広げていくことが必要であると感じる。
- ・特に、オリンピックを観て子ども達がスポーツをやりたいと感じた時に、学校ではなく地域でそれを受け止めるという形を、早いうちに作り上げないといけない。
- ・パラリンピックについては、私が昔ドイツを訪れた際に車椅子マラソンを街角で観る機会があったのだが、コーナーでは自分の車椅子を横の選手の車椅子にぶつけての場所取り、大変激しいものであった。健常者の競技と全く同じことを車椅子でやっているのを観て、「すごいスポーツだな」とその時に初めて障がい者スポーツを尊敬した。その経験もあり、地元の障がい者の水泳選手がシドニーパラリンピックに出場することになった時、中学生だった私の娘をシドニーへ観に行かせた。すると、やはり人生観が変わったようだ。オリンピックも良いのだが、心のバリアフリーの視点からは、三重県の子ども達に東京で開催されるパラリンピックをなるべくたくさん観せてやるのが大事だと思う。
- ・サミットやオリンピック・パラリンピックを踏まえて、外国人にどうやって来てもらうかという話だが、各地にたくさんいるALT（外国語指導助手）を活用して、地域から外国への情報発信に協力いただく、もしくはアルバイトのような形でやっていただくのはどうか。
- ・外国人を呼び込む取組は、ある程度目標を決めたほうが良い。例えば、三重県の店に英語メニューを揃えるという時に、店の数に対して少なくとも50%までは何年で達成しようという目標を立てるとか、さらに市町村ごとに目標を立てるといったことが考えられる。道路標識についても同じことが言える。
- ・これまで日本語だけでやってきてローマ字ぐらいの対応しかなかったところを、外国人が来て楽に歩ける、住めるというところにしようと思うと、随分思い切らなければならぬ。徐々にやっていくというのではなく、目標を

決めて、いくつかの項目はいつまでに達成する、その後にもし問題が起きれば整理するというぐらいの気概でやっていかなければならない。

### 鈴木知事：

- ・各委員の話に共通していたのは、オリンピック・パラリンピックがゴールではなく通過点であるということ。その後に向かってどうしていくのか、そこから何を続けていくのか、何をスタートしていくのかが大事だということだった。そういう受け止めをしっかりしていきたい。
- ・欧州からの観光客については、最新の10月の観光庁の宿泊旅行統計調査において47都道府県の外国人宿泊者数を国別にみると、三重県は上から中国・台湾・欧州となっており、今回初めて欧州がトップ3入りした。欧州が3位までに入っているのは広島県・京都府・三重県だけとなっている。サミット後、三重県の外国人宿泊者数は対前年伸び率約10%となっているが、G7に限って言うと約40%伸びており、そうした芽が少しずつ出てきている。
- ・パラリンピックの関係で言うと、この1、2年で身体障がい者水泳、ボッチャ、車椅子卓球の日本代表の合宿が三重県で行われ、それぞれ地域の子ども達と交流していただいた。とりわけ、西村委員が仰った「体の中を冷やす」という話に関連して、三重交通Gスポーツの杜鈴鹿では宿舍の横に温泉があるのだが、日本身体障がい者水泳連盟の方から「温泉と冷たいプールに短い時間で交互に入れるので疲労回復に役立つ」との言葉をいただき、極めて素晴らしいキャンプ地との評価をいただいた。
- ・ラグビーについては、三重県と鈴鹿市の共同でキャンプ地誘致に手を挙げており、会場は三重交通Gスポーツの杜鈴鹿を念頭に置いている。試合会場の花園ラグビー場と豊田スタジアムのちょうど間ぐらいに位置しているので、地理的にも非常に良いのではないかとということで誘致に取り組んでいる。
- ・今年8月に女子15人制ラグビーのワールドカップがアイルランドで開催される。日本代表のキャプテンである齋藤聖奈選手は、三重県で去年発足したPEARLS（パールズ）という女子ラグビーチームの選手で、四日市の住友電装で働きながらアスリートをやっていた。こうした背景から、女子ラグビーにも力を入れて取り組んでいる。
- ・ボッチャの日本代表が三重県で合宿をされた後、リオで銀メダルを取られた。国体では、2021年に三重県で開催される全国障がい者スポーツ大会から正式種目になる。こうした縁から、三重県はボッチャに力を入れていこうとしており、世界大会の誘致を目指して現在各方面との調整をしている。
- ・居酒屋の話については、外国人に長期滞在してもらおうと思うと、やはり重要だと考えている。聞いた話では、志摩のアマネムの宿泊者が、鵜方にある英語対応が地域で唯一可能な居酒屋に行くそうだ。宮崎委員の話はごもつともだと感じた。
- ・バリアフリーの関係について、「NPO法人 伊勢志摩バリアフリースターセ

ンター」が、車椅子での伊勢神宮参拝に取り組んでいる。先般、国連専門機関である世界観光機関UNWTOの事務局長が日本で講演された際、伊勢志摩バリアフリースポーツセンターという固有名詞を出して、ユニバーサルツーリズムの先進的な事例として紹介されていた。そうした国際的にも先進的な事例が三重県にはあるので、それを波及していけるよう努力していきたい。

- ・西村委員が仰ったスポーツと技術力の関係については、技術力という三重県の強みをスポーツと結びつけるという視点が欠けていた。改めて考えていきたい。

#### **津谷委員：**

- ・道順や道路標識、お手洗いの場所など、英語での対応は本当に大切だ。昔、ソウルを訪問した際、標識や表示がほとんど全てハングルで、意味が分からず本当に大変だった。現在はスマホでSNSなどを使って情報を得たり、発信したりできるので、訪問先の印象が良ければ宣伝効果も高いはずだ。
- ・パラリンピックのマラソンと自転車競技では、目の不自由な選手に必ず伴走者がいる。三重県の若い人にも伴走を体験させてはどうか。目が見えない人と一緒に競技を行うことで、バリアフリーの意味を直接体感できる。障がいを持つ方が健常者と一緒に出られる大会を県内で開催すると良い。

#### **増田委員：**

- ・知事が外国の方をお招きする時、伝統芸能をお見せする機会があると思う。同じように、県内各地に外国人が訪れた時、地域の伝統芸能に関して、その由来や意味が外国人にも分かる資料を1枚作ってはどうか。文化施設の方などは、外国語で直接聞かれても細かく答えるのは困難なので、英語に限らずフランス語やドイツ語など、地域ごとの特徴や一連のストーリー、あらすじを示したものがあれば良い。

#### **加藤委員：**

- ・皆さんが色々挙げたことを実現するための手法について提案したい。県民が議論する場を提供していくことが重要だ。役所が材料を並べたり作ったりするのでは、いくらお金をかけても大半の人が自分に関係ないと感じる。以前にもお話したが、裁判員制度のように無作為抽出で人を選ぶ形式が良い。
- ・例えば、地方創生の総合戦略策定にあたって、多くの自治体はコンサル会社に丸投げをしていたが、私どもが関わったところでは、例えば1,000人の住民をランダムに選んで策定への関与をお願いすると、だいたい5%くらいが参加してくれる。皆さん普通の、おばさん、おじいさんから、茶髪の若者まで様々で、肩書きや学歴もいろいろ。ところが2週間に1回くらいの頻度で議論すると、ものすごく良い意見が出てくる。地方の町の審議会というと、地元の大学の先生や商工会議所の人などが多く、ありきたりの議論になるの



が相場。ランダムに選んだ人の議論の方が余程面白い。後で意見を聞くと、「こんなに自分の町のことを考えたことはなかった」、「とても面白かった」という声が多い。今からまだ時間は十分にあるので、県内の色々な場所でオリンピック・パラリンピックを考える住民協議会のような形で進めていけば良い。騙されたと思ってやってみれば驚くほど効果があり、日本人はやはり優秀だと改めて思うと思う。

- ・参考までに、1,000人に案内して、参加してくれる50人には良いバイアスがかかっており、公共意識の高い上位層の人が来てくれることになる。その後、PTAやNPOなどの活動につながることも期待できる。

#### **西村委員：**

- ・知事の奥様である武田美保さんには三重大の特任教授を務めていただいているが、学生の教育に効果が高い。個人的には、スポーツ選手は割と不遇という話を最初に話されたのが印象に残っている。マイナースポーツなどの選手を企業が社員として雇って支援することは、三重県でも実施されていると思うが、ほとんど知られていない。そうしたトップアスリートの姿を見せることで、若い人や子どもが影響を受けるので、教育効果は高いはずだ。アスリートのセカンドキャリアを大切にし、特にマイナースポーツでトップの人に県内の様々な地域に入り込んでもらう仕組みが作れないだろうか。

#### **白波瀬委員：**

- ・スポーツに取り組む若い人達への支援について、中小企業を含め、地域を中心に財源を集めて「三重」という言葉を入れた奨学金制度を作るというのはどうか。もしくは、そうした取組は既に行われているのか。

#### **鈴木知事：**

- ・「三重から発進！未来のトップアスリート応援募金」というものをふるさと納税形式で実施している。また、クラウドファンディングという形で「吉田沙保里賞」というものを設けている。これは県外の人も含めて、吉田沙保里さんのように世界で活躍する、高校生以下の方を表彰する制度だ。
- ・選手の就職先で言えば、先ほどの女子ラグビー選手を住友電装で雇っていただいたり、フェンシングの選手を三重テレビ放送で雇っていただいたりしている。「アスナビ」という仕組みを活用して、アスリートの就職先が約100社決まりつつあるような状況である。

#### **速水委員（座長）：**

- ・英語表記や中国語表記を表示するQRコードを無料で作成できるアプリがある。そのようなQRコードを差し当たり色々なところに貼るだけでも、外国人観光客にとっては大変便利である。そうしたアイデアから生まれる取組は、

予算がなくてもやる気さえあればできる。私は熊野古道の外国人用の安全対策にこのQRコードを使うよう言っているのだが、県はなかなか取組まではない。

- ・サミットの時に使用したテーブルを熊野古道センターに展示しているのだが、子ども達が皆嬉しそうに座っており、いつの間にか親も喜んで座っている。例えば、このテーブルに1,000人とか10,000人の子どもが座って、その中の1人でも「自分もこの席に座れるような人になりたい」と思ってくれたら1つの成果だと思う。オリンピック・パラリンピックも、基本的に子ども達も含めて様々な人が直接関係していくことが大切だ。常にそういう方向でやらなければならないのだが、その辺りが行政はできていない。こういうことをやる時に何が大事なのかを整理していかなければならない。

#### **鈴木知事：**

- ・英語表記など手法のお話をいただいたが、きちんと受け手に伝わり、魅力を感じてもらえるような情報提供体制の構築など、できるところからどんどん環境を整えていくべきということだと認識しているので、しっかりやっていきたい。
- ・県民自身に考えていただくという点では、今回のサミットでも、説明の場という意味での住民懇話会を約40回開催したほか、サミットの半年後に伊勢志摩サミット三重県民宣言を作るにあたって、県民自身にも考えていただくという形をとった。オリンピック・パラリンピックでも、県民自身に考えていただく機会があっても良いように感じる。
- ・パラリンピックの選手やアスリートのセカンドキャリアを地域で巻き込むという話を西村委員からいただいたが、三重県でも、アスリート、特にパラリンピックに関連して同様のことができれば面白いのではないかと感じた。

### **議題2：2030年頃の三重を展望して**

#### **宮崎委員：**

- ・伊勢志摩サミットでは、三重県は食材の宝庫であるということを国内外にアピールしたが、私は食材では売れないと思っている。「松阪牛や伊勢海老があるから来て下さい」とか、「加工して売る」というのも違う。「調理したものを三重県まで食べに来て下さい」というのが大事だ。例えば、ムール貝やオマール海老は良い食材であるが、日本で食べてもあまりおいしくないのと同じことで、三重県に来て食べてもらうことが重要だ。
- ・資料にあったが、「町なかではホルモン屋が大繁盛」というのは、我が意を得たりだ。松阪牛で有名な和田金などはミシュランの高級な世界だが、ホルモンは庶民の食べ物だ。松阪はホルモン横丁（ホルモンサイドストリート）を

もっと世の中にアピールしていくべきだと思う。大阪の鶴橋はコリアンタウンの一角で、そこに来る人を対象に売っている。三重県は食材もあって美味しいものを食べられる、スペインのサンセバスチャンのようなイメージ。道路の両側に店が並んで、それぞれのホルモン屋にファンがいる。英語やフランス語に対応できれば、世界のモツの聖地になる。まずは、聖地化していくことが大事で、ホルモンを加工したものを松阪から世界へ売っていくというのは、その後の段階になる。

- ・私はいつもサンセバスチャンのことを話題として出すが、サンセバスチャンのように海辺に作ろうと思うとそれこそ30年かかる。今ある松阪のサンセバスチャン化というのは三重県の1つの文化になる気がする。店舗などの業者と一緒に、多言語対応や細かい権威付けをしながらB級グルメの聖地として売っていくと良い。また、日本酒ではなく焼酎が主流で、お店ごとにキンミヤ焼酎派とタカラ焼酎派に分かれている。炭酸で割らずに、アルコールが25度の焼酎に梅を入れて飲むというのも含めて、独特の食文化を持っている。

#### **白波瀬委員：**

- ・働き方について、三重県の男性育児休業取得率がこのように急激に上昇している背景はどんなことなのか。

#### **鈴木知事：**

- ・私が育児休暇を取った2012年は、男性が変わらなければならないという視点で少子化対策に全力で取り組んで、皆が政策として重点的にやろうとした年であった。

#### **白波瀬委員：**

- ・取得率が顕著に上がっていることは良い第一歩だと思う。実際に「イクメン」という言葉はなくなるのが望ましいと思うが、例えば特定の性別をターゲットとしない「何とか会議」を仕込んで良いと思う。鈴木知事のようなトップが取り組むということはこれだけの効果があるということで、改めて感心した。
- ・私のような三重県に関係ない者がこの会議にいる理由として、地元メンバーからいただくローカルな話題をいかに外に広めるかということだと思う。この会議での話は感心することや、普通の者にとっては知らないことも多い。インターネットが発達していることは良いと思うのだが、パソコンやスマートフォンは自らアクセスしないと情報が得られない。一方、チラシは勝手に情報が入ってくるので、これを今の情報化のなかで、どう展開させるかというのは意外と重要なのではないか。口コミで情報が広がることも有効であると思うので、力を入れていただきたい。
- ・資料にある観光の項目について、統計の取り方には一言申し上げたい部分も

あるのだが、外国人宿泊者数の 2014 年から 2015 年の上がり方がその後も継続しているのか、たまたまここだけ上がっているのか、実際のデータとともに見てもらうことが重要かと思う。

- ・オリンピックにも関連することだが、地元では三重県と名古屋は地理的に近いという感覚だが、知らない者からすると意外と遠く感じる。これまではサミットの開催など具体的なイベントが集客につながっていたが、その後もどう引き込むかを考えるべきだ。三重県は一度来てもらったら非常に良いところなので次につながると思う。何で最初の第一歩を引き込むかというのは、色々な意味で仕掛けを作っても良いのではないか。また、作るだけの立場にあるのではないかと感じた。
- ・東京大学でもオリンピックに関連してスポーツ科学に取り組んでいるのだが、スポーツ立国というのは教育やスポーツ科学にこだわらなくても、別の分野で何か工夫ができるのではないか。もっとピンポイントに技術力を応用しても良いし、市民スポーツという分野もある。そのあたりの段階的な部分を、税金のかからない自助努力と公的な支援という面から考える必要があるのではないか。
- ・外国語については、当然英語も必要だが、中国語も同じような形で充実させると良い。数的にみれば中国の市場は大きく重要である。

#### **増田委員：**

- ・日本全体としてみると、2030 年にかけてシェアリングエコノミーがますます深まっていくだろう。昔はマイカーやマイホームを持つことが 1 つの夢だったが、今は若い人を中心にシェアすることが主流で、経済の姿やビジネスの姿が変わってきている。
- ・三重県の次の節目として 2033 年の式年遷宮があるが、野村総研では、2033 年に全国で空き家戸数が 2,150 万戸になると予測している。現在は 820 万戸。中古市場はまだ 15%にも達していないが、今後は、シェアリングエコノミーの視点からすると、中古の需要が増える余地があるとも考えている。また、人口減少に伴って、住み手のいない空き家や所有者不明土地の問題が広がっている。これから先、団塊世代が亡くなる時期に差し掛かると相当な件数の相続が発生することになるので、登記を呼び掛けたり、課税情報の把握を強化するなど、対応が必要だ。
- ・自動車についても、U b e r のような仕組みで、所有者と利用者のニーズを結び付け、遊休資産の活用を図ることが考えられる。悪意を持った人が参入する恐れもあるが、行政が規制しすぎるのではなく、市場の機能、利用者のニーズに任せるとうまくいくのではないか。ビッグデータや I C T など、新たな分野の市場が生まれる中で、行政の関わり方を積極的にするのか、消極的にするのか、区別していく必要がある。
- ・最後に、先日、日本老年学会が准高齢者を 65～74 歳、高齢者を 75 歳以上に

定義するよう提言したが、三重県の元気な高齢者、団塊世代の人達が、地域の社会へ貢献する機会を沢山作ると良い。

#### 西村委員：

- ・2030年の人口減少を示す地図を見ると、南の方に色が黒い市町が目につき、悲観的にとらえてしまうが、私は少し違う見方をされていて、黒い市町ほど明るく強くなっていくと考えている。今、学生に人口減少が行きつく先に何が起こるのかを考えさせているが、強い人達が残って行って、元気になる可能性がある。例えば、南伊勢町では、住み続けている人は増えて、40歳以下の世代では人口減少が止まりつつある可能性がある。小中学校に毎年何人くらい入ってくるかを調べているが、ある小学校では20~30人で下げ止まっていて、世帯が一定数残っている。1,000万円くらい稼ぐ漁師や、500~600万円稼ぐ農家など、町に残った人が地域資源を最大限活用して、稼ぐ力を付けている。人口減少を前向きにとらえるのであれば、三重県にはあまりテコ入れをせず、それぞれの市町が適応していく姿を見守ってほしいと思う。各市町に一意的な政策を行ってしまうと、それぞれの特長や個性を潰してしまう可能性がある。地域のことをよく知っている人達にどう立ち上がってもらうかを工夫するべきだ。先日、川越町の方が「私たちは課題が無いことが課題なんです。」と話していて、それはそれで良いと感じた。地域によって特性が異なるので、しっかりと現状認識をして、政策を柔軟に実施する必要がある。

#### 加藤委員：

- ・資料では、従来型の経済成長を前提とした右肩上がりの発想で、こんな良いことがあるから、それを使って皆で何かをやりましょうという感じに見えるが、そのこと自体が変わるのではないか。現状やトレンドから未来の姿をみているが、12~13年後には、現状やトレンドは既に陳腐化して、あるいは次の局面、さらにはその次の局面に移っている可能性が高い。今は我々の生活を通して様々な情報を提供する一方、その情報を集めて分析して提供するというクラウドがあり、我々自身はその間にいるという状況ができつつある。極端なことを言えば、あと5年くらいで、個人のGPSから色々な情報が取れるようになる。例えば、「加藤という奴があそこにおいて脈拍が上がっている」という情報が取れるようになるだろう。
- ・先ほど、増田委員から話があったように、日本中で資産が余っている。公的な資産も戦後60年くらい、欧米の3倍くらいのペースで作ってきたので余っている。その結果、シェアリングエコノミーというものが成立するようになっている。しかし、2030年まで行くと、Uberでさえ、ひよっとすると終わっているかもしれない。エコとかシェアとかローカルとか、成長型ではないキーワード、あるいはその先にあるものがクローズアップされているだろう。

う。

- 2030年には、行政の役割も変わっていくのではないかと。あまりこんなことを言うてはいけないと思うが、2030年の前の段階で日本の国家財政は破たんしている可能性もある。自治体も大変になっており、行政は事業をするのではなく、議論の場所を作ったり、ルールメイクしたり、行司役をしたりという、プレイヤーではない部分を担うようになるのではないかと。
- AIを活用すると、弁護士や薬剤師など、士業の仕事はほとんどなくなるのではないかと。そういう仕事は人間的上等というより機械的上等という感じがするので、機械が代わるのではないかと。
- 世界的に見ても、Brexitやトランプ現象というのは、一言でいえば経済の自由化、グローバリゼーションの弊害をどうするかということだ。中国とかインドとか、新興国とかグローバルを睨みつつ、我々、日本のような先進的領域はローカルなものをベースにして、彼らと伍していく方策を考える時代なのではないかと。私は元々、TPPは成立するだろうけれど寿命はあまり長くないと思っていたが、成立すらしなさそうだと。自由化のためのルールというのは相当変わるのではないかと。むしろ、ローカルで行く部分とグローバルで行く部分をかなり並列で考えないといけないのではないかと。そういう中で、ローカルなレベルの行政というのは力を発揮するところが増えるし、先ほど、西村委員が仰ったように、高齢化とか少子化が行きついた後は、ある意味では楽しみな時代がスタートするのではないかと。

#### **速水委員（座長）：**

- 県内のあちこちで面白い動きがあるなかで、行政はどのように見るのか、どのようにうまく育てていくのかということがポイントになる。特に南部の人口減少が激しい地域では、行政の能力や着眼点が大事になる。加藤委員が仰ったように、右肩上がりの経済とは異なる視点で見るという価値観を導入していかなければならない。人口減少だけが地域を見る指標なのか、考える必要があるとも感じた。
- 様々なことがインターネットにつながっているが、行政の取組は民間より遅れている。この会議が始まった時から県庁に申し上げているが、たくさんの紙の資料を配るぐらいなら、委員にタブレット端末を渡して電子文書だけで会議を行ってはどうか。三重県自体が本気になってITを導入しなければ、データ処理の面で後れをとるだろう。
- 米国ではESTAという電子渡航認証システムがあり、こんな制度どうするのだろうと思っていたが、瞬く間にインターネットでの登録を可能にした。家族の力を借りて登録する人もいるだろうが、米国人は全員インターネットを使って登録しているということになる。日本で全員インターネットを使って登録しなければならなくなってもできないだろう。そういう意味では、情報弱者に対するフォローにも取り組みながら、行政が思い切ってやらない

限りIT化はできないと思う。

- ・林業家からすると2030年はすぐそこという感覚で、我々の間では50年先、80年先、100年先の話をしている。林業では頭の中に常に80年先の森林のイメージを持っていて、そこからバックキャストして、今何をすべきかという判断をしている。「この森林が80年生になった時にこういう姿にしたい」ということを従業員と共有し、どのように間伐したり下草を刈ったりすれば良いか一緒に考えている。同じく2030年の三重県について、これだけの将来像ができているのであれば関係者が共有し、将来像からバックキャストして、具体的に今は何をすると考えていく。そうすれば陳腐化した時でも、常に現実と将来を見据えているので、計画の変更にも対応できる。本当にこういう2030年の姿を作るのであったら、各部各課で、この中から1つ選んで事業をやってみるといぐらいのことがあっても良いのではないか。

### 鈴木知事：

- ・白波瀬委員が仰ったインバウンドについては、平成27年の外国人宿泊者数は39万2千人で、この年の6月に伊勢志摩サミット開催が決定した影響から119%増と、全国の46%増より高い伸び率になった。平成28年の数字は10月分までしか出ていないが、前年を楽に超えるという予想だ。ちなみに国内からの宿泊者も含めた総宿泊者数についても、平成28年1～10月の対前年伸び率は全国2位となっている。
- ・男性の育児休業取得率については、三重県庁で直近14%となっている。有給で5日間程度の育児休暇についても約9割が取得している。こうした状況もあり、昨年の合計特殊出生率は1.56で、全国順位は19位だが、全国3番目の伸びを示している。三重県では、特に平成25年度から少子化対策に力を入れている。
- ・速水座長が仰った、行政がどうあるべきかについては、大変重要なことであり、現状やトレンドから考えるという思考的な縛りを変えていかなければならないと感じた。行政では「妄想する」ことが許されないところがあるが、今回の資料は事務局に妄想して作ってもらった。将来像からのバックキャストと現状からの積み上げについて、全ての行政分野において取り組むことが理想だが、少なくとも長期レンジで考えなければならないような分野では、その両方をしっかりやらなければならないと思っている。
- ・西村委員が仰ったように、根幹は住民自身にどう立ち上がっていただくかだと考えている。伊勢志摩サミットが決まり安倍総理とニューヨークに行った際、サミットを通じて三重県がどう進化するのかというビジョンは、サミット終了後に住民がプライドを感じて自らの手でイノベーションしていく、そういう地域にすることだと申し上げた。他人に任せたまちづくりでは納得感がなく、知事が悪い、議員が悪いと誰かに責任を転嫁してしまう。自分がやったからこそ失敗も真摯に受け止められるし、次への意欲が出てくる。どん

な分野であれ、最終的には住民にどう立ち上がっていただくかということだと考えている。それに加えて、セーフティネットや巨大災害への対応など、住民だけではできないところは行政がしっかりやっていくことが大事だと感じた。

#### **宮崎委員：**

- ・お酒の業界では、三重県は元々、灘と伏見の桶売りをしてブランディングが全くできていなかったが、今回のサミットで若干ブランディングができた。同じ状況なのがお茶だ。伊勢茶というけれど、現実には宇治や静岡に売っている。外国人は宇治とか静岡とか言わず、全て日本のグリーンティーと言っているのだから、伊勢茶を売るべきだと思う。静岡は4文字と長い、伊勢と宇治は2文字と短いので言いやすいと思う。今回の菓子博の時にもっとやればよかったと思ったのが、このお茶だ。原料として売っているものをどうするかということと県と一緒にやって欲しいと思う。

#### **白波瀬委員：**

- ・E S T Aの話があったが、E S T Aだけでなく米国の行政はそれほど効率的とはいえない。つまり、行き着くところは民間と行政は違うということだ。行政は、民間的な枠組みとは違う役割があるからこそその存在である。
- ・グローバルという言葉については、「地球規模の」ということはあり得ない。例えば、EUは最初からある程度の囲いがあった中のグローバル化という話であった。グローバルは常にローカルやリージョナル、地域化という言葉と一緒にあって、その単位が国や国の中のそれぞれの地域に姿を変えている。市場が全くないところでのグローバルというものは、私は幻想だと思っている。
- ・一方で、市場というものはある程度の広さがあり、オープンになることのメリットが多い。誤解を恐れずに言うと、例えば、人口減少の一番重要なメッセージは、危機感というよりも「前もって仕組みを考えるべき」ということではないか。逆に言えば、うまくいっている市町村は県が邪魔になっているという話を聞く。この仕組みを、今はできていなくても次の世代の人達にどう提供してあげるか、そこが一番重要なところではないかと思う。

#### **増田委員：**

- ・2030年が段々と視界に入ってくる一方、2100年と言うとすごく先の話のようだが、今年生まれた子ども達はまだ生きているはずだ。そのくらい視野に入れて、今から生まれてくる子ども達のために何ができるか考える、そんな視点があっても良い。その頃には、成長に対する考え方、物事を判断する尺度がさらに多様化していると思う。物質的な面だけではなく、精神的な面も含めて、評価の軸が変わっていくような時代に、行政が主導すべき分野と、



控えておくべき分野がある。先ほどのシェアリングエコノミーの話も、タクシー業界が成り立つ都市部と、車の台数が圧倒的に少ない過疎地域とでは話が違って、個人と個人を結びつける仕組みがないと生活が立ち行かないような地域では積極的に関わる必要がある。環境分野など、市町が従来やっていたことに県が乗り出さないといけないこともあるので、見極めをどう行うのが大事だ。

#### **加藤委員：**

- ・ 価値評価の基準みたいなことで言えば、今まで私の周りの方、例えば、総理経験者、大企業の社長、学生などに「あなたが今までで一番幸せだと思った時、思ったことは何ですか」という同じ質問を投げたところ、皆、一様にたわいもないことを挙げていた。「家に帰ってお風呂に入った時」、「子どもの顔を見た時」、「両親に褒められた時」など。先ほど、知事も仰っていたように住民というのは、自分でやれば納得性がある。美味しいご飯を食べに行くのも良いが、自分で作って美味しければ満足度も高くなる。自分でやると、お金に対する依存度も低くなる。
- ・ GDPの対極にある精神的なものというのは数値化が難しいが、こうした現金依存率というのは、ある程度擬似的に作れる。東京の住民の現金依存率は世界でも高いのではないかと私は思っている。だから、お金が無くなったら食べることもできず、派遣村が必要になる。三重県は日本全体で見ても、それほど現金依存率は高くないと思う。現金に依存しないというのは、GDP上で見ると一貧しいかもしれないが、生きていく上での満足度は高いのではないか。そういうものを、2030年までのストーリーの中に入れて、三重県が開発した指標ということで、グローバルスタンダードになるくらいのつもりで発信しても良いかと思っている。

#### **速水委員（座長）：**

- ・ 今日、環境関係の企業に頼まれて委員会に出たのだが、薪のエネルギーを普及させるとお金にはならないかもしれないが、石油を海外から買うよりも地域の中でモノが回るのではないかと、それをもっと地方で普及させると精神的に豊かになるのではないかという話題になった。仕組みについても、効率的なボイラーを投入すれば良いし、石油に頼らない自活エネルギーの実現には、シェールガスではなく山の薪を使うとかなり確率が高くなるという話をした。それを踏まえて、加藤委員の仰った現金に頼らないという話は大変面白いと感じた。地元に戻ってきた若い連中には、「家の裏口に野菜を積み上げられているようになったら本物だ」、「野菜を見て誰が作ったかが分かって、お礼が言えるようになったら町で信用される」、「そうなるまで頑張りなさい」と言っている。

## ご欠席委員のご意見

### 沼尾委員：

○三重県は豊かな地域資源と文化を誇り、名古屋や大阪などの大消費地にも近いという恵まれた環境にある。

○政府の成長戦略の下では、グローバル化を見据えて、高付加価値型の産業を育成し、雇用を生むことが掲げられているが、その種となる技術・資源・文化の種が数多く眠っている。

・今回の資料を拝見すると、すでに磨きをかけて、またサミット等で、光が当たるなど、成果のあがった技術・資源・文化等について、さらに力をつけるべく、攻めの取組を掲げていることはすばらしい。

・しかしながら、人口増減率や、高齢化率の状況を見ても、地域の資源・風土・文化を守る担い手の存在が心配である。特に南部の地域には、未だあまり知られていないが、磨けば光る様々な資源があると考えられる。こうした、県内にある、地域資源の種を守る取組もまた、並行して行う必要があると考えられる。

・残念ながら、地域で暮らしを営み、資源・風土・文化を守り、それらを活かした知恵と技能を持つ人々は 70 歳代後半を過ぎている。団塊世代から下は、高度成長期の中で、機能的で利便性の高い技術を身につけるべく、多くが大都市に流出したことを考えると、全国の多くの農山村地域で、こうした技能の継承が危ぶまれている。(三重県の場合には、例えば遷宮のような次世代への技能継承の仕組みがあるが、こうした手法が、地域のあらゆる技能継承の領域に浸透しているのか、わからない。)

彼らの持つ知恵や技能を次世代に継承できるとすれば、この 10 年間で勝負であるといっている。こうした「人財」の存在と地域力を、それぞれの地域が確認し、将来像を共有しながら、豊かな風土・文化と技能を次世代に継承することを、考えていく必要がある、そのための取組を進めていく必要があるだろう。